インゴ・ギュンター Ingo Günther

アートで見る地球の実相

●メディア・アーティスト。1957年生れのドイツ人。フランクフルト大学で文化人類学を学んだ後、デュッセルドルフ芸術院でビデオ・アーティスト、ナムジュン・パイクに師事。地球儀をキャンバスに世界情勢を描く手法で知られ、その作品は、94年から99年まで『フォーサイト』の表紙を飾った。

[ニューヨーク発]「知的所有権」という観点から地球を眺めると、おもしろいことがわかる。左の地球儀は、アメリカで登録されている特許所有者の（登録上の）出身国を、数の多さに比例する大きさで表したものだ（データは作成時に最新だった二〇〇七年のもの）。日本、ドイツ、イギリスの持つ特許がどれほど多いかがわかる。

スイスのジュネーブに本部を置くWIPO（世界知的所有権機関）によると、〇八年、アメリカの特許所有者に外国人が占める割合が初めて半分を超えた。〇七年には五一・二%だったアメリカ人の比率が四九・七%になったのだ。代わって増えたのが、韓国、日本、中国の個人や企業がアメリカで得た特許だった。中国は一年で十三番目から九番目へと順位を上げて、オランダを抜いた。

その中国では、アメリカとは反対に、中国人の所有する特許が年々増えており、〇八年、中国では初めて、地元から申請されて認められた特許が、外国人の特許を上回った。ちなみに日本で認められている特許の八八%が日本人によるもので、韓国ではこの比率は九八・五%だ。

アメリカ人による特許が半数を割ったことについては、科学技術分野におけるアメリカの先進性が失われつつあることを示すのではないか、といった議論が湧き起こった。だが、アメリカ人の比率が下がった原因は、自国と並行してアメリカでも特許を申請する外国人が増えたことによる方が大きい。背景には、アメリカの特許保護期間が長いことがある。

アメリカ国内の特許所有者は地球儀には表していないが、州別に見ると、カリフォルニア在住者が一二%で最も多い。

過去二十年の間に、世界中で認可された特許のうち、〇七年の時点で有効だったものは総計六百三十万件。このうち日本在住者の持つ特許が百二十万件で、アメリカ在住者のものが百八十万件。両国をあわせると実に全体の四七%にもなる。

しかし、〇五年から〇七年の二年間だけを取り出すと、中国、韓国、イスラエルの特許所有者が、それぞれ六九・四%増、三二%増、一六・一%増と急激な伸びを示している。これらの国々の勢いが続くとしたら、地球儀上のJAPANの文字が、いつまでもこの大きさでいられるとは限らない。

訳＝鮎川なつみ F